



**Data** 2023-32

監督・脚本・製作：スティーヴン・スピルバーグ

脚本・製作：トニー・クシュナー

出演：ミシェル・ウィリアムズ/ポール・ダノ/セス・ローゲン/ガブリエル・ラベル/ジャド・ハーシュ/ジュリア・バターズ/キリー・カルステン/ジーニー・バーリン/ロビン・パートレット/クロエ・イースト/サム・レヒナー/オクス・フェグリー

## 👁️👁️ みどころ

“世界1”の実績を誇る巨匠となったスティーヴン・スピルバーグ監督が、自叙伝的作品に挑戦！もっとも、日本経済新聞の「私の履歴書」とは違い、少年期から青年期までの限定バージョンだ。ユダヤ系アメリカ人の両親を持つ彼は、戦後の豊かなアメリカで、いかに映写機に接し、いかに映像世界への道を決断したの？

技術者たる父親の血と芸術家たる母親の血はどちらも優秀だが、全く異質なものだったから、サミー少年と「映画は趣味！」と考える父親との壁は厚い。他方、母親の“浮気疑惑”が、多感な少年に与えた影響は大。さらに、ハイスクールで受けた、ユダヤ系であるためのいじめの影響は？

父親の転勤のたびに大きな家になっていくのは結構だが、その中でどの悩みが赤裸々に！しかして、ある時期に下した彼の人生最大の決断とは・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■あの巨匠が、今なぜ初の自伝的作品を？■□■

1946年生まれのスティーヴン・スピルバーグ監督は、1949年生まれの私より3歳年上だが、映画監督としての実績は世界一だろうし、なお現役で活躍中だからすごい。しかして、“功成り名を遂げた人”は誰しも、日本経済新聞が連載していた「私の履歴書」的な自叙伝を作りたくなるらしい。数年後に80歳を迎えようとする今、彼がなぜそんな心境になったのかは知らないが、彼は「この物語を語らずに自分のキャリアを終えるなんて、想像すらできない」と語り、「夢を抱くすべての人へ」として、本作を監督、脚本、製作した。

本作の主人公は、少年期のサミー・フェイブルマンと青年期のサミー・フェイブルマン（ガブリエル・ラベル）、そして、彼を支える母親のミッツィ（ミシェル・ウィリアムズ）

と父親のパート（ポール・ダノ）だ。日本経済新聞の「私の履歴書」は、一般的に、幼少期から引退期までの全履歴が1か月間にわたって紹介されるが、本作はサミー・フェイブルマンが少年期の1952年から、大学を中退しハリウッドの映画製作の世界に入る1960年代中頃までの半生（のみ）のステイーヴン・スピルバーグ監督が描かれている。『ロッキー』シリーズでは、貧乏生活からのし上がる中でボクシングと出会い、小さな成功を積み重ねながら最後に大成功を収めるというスリリングな人生が描かれていたが、本作は敢えてステイーヴン・スピルバーグ監督が成功していく過程や、世界的巨匠になっていく物語を描いていない。したがって、151分という長尺の中で描かれるサミー・フェイブルマンの少年期から青年期はかなり濃密なはずだ。本作を鑑賞するについては、まずはそんな点に注目。

### ■□■主人公初の映画体験は？米国生活の豪華さにビックリ！■□■

私の初の映画体験は、小学校低学年の時に、両親に連れられて自宅から歩いて5分もかからない映画館で、東映のチャンバラ映画やお姫様映画を観た時。俳優は中村錦之助、東千代之介、片岡千恵蔵、そして美空ひばり等々だった。また、一人で学校推薦映画を観たのは、小学校4年生の時の『にあんちゃん』（59年）だった。そんな体験もあって、私は中学生になってからは一人で3本立て55円の映画館に通うようになった。それが今日の映画評論家・坂和章平を生んでいるわけだ。

それに対して、サミー・フェイブルマン少年が両親に連れられて初めて映画を観たのは1952年、セシル・B・デミル監督の『地上最大のショー』（52年）だった。「暗いところなんかイヤだ」と怖がるサミーに、科学者である父親が、映写機の仕組みを冷静かつ客観的に解説し、音楽家でピアニストである母親が、「映画は観たら忘れないステキな夢よ」と情緒的に説得する姿は、本作のその後の展開を暗示している。サミー少年の映画初体験は、家族がニュージャージー州に住んでいた時の1952年だから、私の映画初体験より少し昔だが、映画館の立派さ、バカでかい車で映画館を往復するフェイブルマンズ（家族）の姿、さらに、フェイブルマンズが暮らす家の豪華さ、ソファ、冷蔵庫、TV等の豪華さを見ると、敗戦直後の1952年当時の日本と世界一豊かな国アメリカの1952年当時の姿をどうしても比較してしまう。私が小学生の頃は、TVも冷蔵庫もなかったし、映画館の豪華さは雲泥の差だ。米国生活の豪華さにビックリ！

### ■□■ハムカとは？その日のプレゼントは？更に映写機も！■□■

アメリカは“移民の国”として成立した国だから、“自由の女神”に象徴される自由が売り。ところが、実際は黒人差別をはじめとする人種差別はひどいもの。太平洋戦争中の敵国である日本への差別は仕方ないとしても、実は中国人や日本人等の黄色人種への差別は戦争以前から根強いものだった。それは、ユダヤ人に対しても同じ。すると、ユダヤ系アメリカ人であるフェイブルマンズにも差別が・・・？

父親のパートは第2次世界大戦の退役軍人だが、コンピューターデザインの先駆者とし

での革新的な業績を会社から高く評価されていたらしい。しかし、彼はユダヤ系アメリカ人だったから、フェイブルマン一家の宗教はキリスト教ではなくユダヤ教だ。日本人にはその違いすらわからない人も多いが、キリスト教とユダヤ教は全く似て非なるもの。それは本作冒頭にも、 “ハヌカ” の風景を見ればよくわかる。キリスト教ならクリスマスは年間を通じて最大の行事だし、そこでは “祈り” はもちろん、クリスマスツリーやクリスマスプレゼントがつきものだ。しかし、本作では、クリスマスの代わりにユダヤ教の祭りである “ハヌカ” を祝う風景が描かれるので、それに注目！ハヌカの日に、サミーが父親からプレゼントされたのは、電動式の鉄道模型セットだからすごい！しかも、8日間も続くハヌカの間、列車は毎日1個ずつプラスされたから、さらにすごい。ところが、映画初体験の日に大スクリーン上で見た、列車と自動車の衝突による脱線シーンに大きな衝撃を受けたサミーは、その電動式鉄道模型セットを使って、衝突事故を何度も再現して遊んでいたから、アレレ。これは科学者である父親の血を引いたもの？それとも、芸術家である母親の血を引いたもの？それはともかく、そんなサミーの行為を見かねたミッツィは、サミーに夫の8ミリカメラを与え、「これでその場면을撮影すれば列車も壊れない」と教えることに。これがスティーヴン・スピルバーグ監督（＝サミー少年）のカメラ初体験、撮影初体験だったが、その出来は？

### ■□■転勤（栄転）の是非は？父子の価値観の対立は？■□■

1970年代以降ずっと続いた高度経済成長時代の日本では、公務員もサラリーマンも転勤がつきもの。そして、転勤のたびに地位も給料も上がり、生活水準全体が上がっていくのが常だった。戦勝国たるアメリカでは、1950年代でもそうだったらしい。しかも、ユダヤ系アメリカ人のバートは、早くからコンピューターに目を付けていたから、技術者としてかなり優秀だったらしい。そのため、RCA社でのコンピューターの革新的なライブラリー・システム開発の功績が認められたバートは、ゼネラル・エレクトリック社にスカウトされ、一家はアリゾナへ引っ越すことに。

この時、サミーはすでに2人の妹を役者に起用して、次々と映画製作に励んでいた。そしてミッツィは4番目の子供まで産んでいたから、フェイブルマン家の前途は有望だ。もっとも、この転勤に際しては、RCA社での同僚かつ親友で、子供たちからも「ベニーおじさん」と慕われているベニー・ローウィ（セス・ローゲン）をニュージャージーに置いて行くのか、それともアリゾナに同行させるのかについて、ちょっとしたトラブルが起きるので、それに注目！

アリゾナでの新しい暮らしが始まる中、サミーはジョン・フォード監督の『リパティ・バランスを射った男』（62年）を観たことから、映画作りの野心が芽生え、次回作に第2次世界大戦を描く “大作” を構想。そのためには、今より優れた性能の8ミリカメラと編集機が必要だったため、サミーはそれをバートにおねだりしたが、値段を聞いた父親からは、「正気か？たかが趣味のために」と言われてしまったから、アレレ……。ここに発生

した父子間の価値観の対立の行方は？

## ■□■芸術はたかが趣味？ボリスおじさんの影響は？■□■

ユダヤ人が数学や科学に強いのはアイン・シュタインを見れば明らか。また、ユダヤ人が音楽や芸術に強いのはミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』を見れば明らかだ。そして、前者の典型が父親のバート、後者の典型が母親のミッツィだ。すると、その2人の長男として生まれたサミーは、どちらの血を引いているの？

バートは、サミーが母親から与えられた映写機で次々と映画制作することを認めていたが、それはあくまで“趣味”として。その結果、男としての本来の仕事は、大学に入り勉学に励み中で決めていくべきと考えているバートの口からは「正気か？たかが趣味のために？」の言葉が出たわけだ。それに対して、本来ならミッツィがミッツィなりのアドバイスを与えるところだが、アリゾナへ引っ越した当時のミッツィは、突然母親を亡くしたため悲嘆に暮れており、その役割を果たすことができなかつたらしい。そこで、バートはサミーに対してマンスフィールドの8ミリ用編集機を買い与え、一家とベニーで行ったキャンプ旅行で、サミーが撮ったフィルムを編集し映画を制作するよう頼んだが、その効果は？

サミーの映画制作について、父親、母親以上にサミーに対して大きな影響を与えたのは、ミッツィの母の兄、ボリスおじさん（ジャド・ハーシュ）だ。妹を悼むためにやってきたボリスは、サーカスのライオンの調教師からハリウッドへ転身した人物で、一族では変わり者として恐れられていた。しかし、ボリスが語る映画界の話に興味津々のサミーは、自身の戦争映画について熱く語ったから、2人の信頼関係は深まっていくことに。そんなボリスはサミーの芸術感情を認めながら、「忘れるな。芸術は輝く栄冠をもたらす。だが、一方で胸を裂き、孤独をもたらす」と忠告したが、サミーはそれをどう受け止めるの？

## ■□■母親の変調はなぜ？ベニーとの浮気疑惑は？■□■

アカデミー賞主演女優賞にノミネートされながら、惜しくもその座を『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（エブエブ）（22年）のミシェル・ヨーに奪われたのが、本作でミッツィ役を演じたミシェル・ウィリアムズ。夫を支えながらサミーを筆頭とする4人の子供たちを育て上げ、かつ芸術を愛する洗練された音楽家としての姿を時折見せるミッツィは、当時のアメリカでしか存在しない素晴らしい女性だ。

彼女の芸術的センスが、サミーの映画作りの才能に大いに寄与したことは疑うべくもないが、母親の死亡を契機として体調を崩していたミッツィを元気づけるべく、サミーが家族ムービーの編集をしているうちに、サミーはとんでもない発見をしてしまったから、さあ大変！ニュージャージーからアリゾナへの引っ越しの際、バートの同僚であり、子供たちからも“ベニーおじさん”と慕われていたベニーを置いていくべきか、同行させるべきかについて、ミッツィがえらくムキになっていたことは前述したが、その理由が、ミッツィとベニーとの浮気疑惑（？）にあったことを、思春期に差しかかっていたサミーが発見したのだから大変。ある日から、サミーはミッツィに対して一切口を利かなくなってしまう

ったから、事態は深刻だ。さあ、ミッツィはどうするの？ どうやってサミーの心を開かせるの？

本作は、スティーヴン・スピルバーグ監督の自叙伝的映画だから、ミッツィとベニーとの浮気疑惑(?)をどこまでスクリーン上に表現するかは微妙なところ。サミーがそれを発見したのは、編集機を駆使して丁寧に1コマ1コマを確認していた際、背景に映り込んだ“あること”に気づいたためだが、そんな“あること”から推測される2人の関係は本当に浮気なの？ それとも、何かの間違いなの？ 本作では、真実が明かされないまま、それがサミーとミッツィの“2人だけの秘密”にされるストーリーが続いていくので、私には少しモヤモヤ感が残ってしまう。ちなみに、古き良きアメリカの上流家庭における理想的な良妻賢母をジュリアン・ムーアが熱演した『エデンより彼方に』(02年)『シネマ3』165頁)では、夫に秘密があった他、ヒロインと黒人男性との心の交流がある悲劇を生んだが、さて『フェイブルマンズ』では・・・？

## ■□■いじめに直面！その克服は？遂に両親も離婚！■□■

1974年に弁護士登録した私は、自宅も事務所も何度も移転したが、本作に見るフェイブルマン家も、ニュージャージー州からアリゾナ州へ、そして、アリゾナ州からカリフォルニア州へ、と二度の引っ越しをしている。一度目はスカウトによるものだったし、二度目はIBMへの転職だから、引っ越しの度にパートの収入は大幅アップだし、家族が住む家もどんどん立派になっていくので、それに注目！ニュージャージーからアリゾナへの引っ越しにはベニーが伴っていたが、アリゾナからカリフォルニアへの引っ越しにはベニーの同行はなかった。また、カリフォルニアでの新居は建築中だったから、しばらくの間フェイブルマン一家は古いカビ臭い借家生活を余儀なくされることに。そんなことが、ミッツィの精神面、健康面にどのような影響を？

他方、ハイスクールに入ったサミーは、ユダヤ人嫌いの同級生のローガン(サム・レヒナー)とチャド(オックス・フェグリー)に目をつけられたから大変。いじめは日本だけではなく、自由と民主主義の国アメリカでも存在していることを、スティーヴン・スピルバーグ監督は自叙伝的映画の中で赤裸々に描いていくので、それに注目。その姿がどこまでカッコいいか悪いかを含めて、しっかり観察したい。

さらに、ミッツィとベニーとの“浮気疑惑”については、ミッツィとサミーの“2人だけの秘密”にする“密約”が成立していたし、カリフォルニアで新たに完成した豪邸にミッツィは十分満足しているように見えたから一安心！そう思っていると、ある日、4人の子供たちは、両親から突然「私たちは離婚する！」と告げられたからビックリ！それは一体なぜ？ やっぱり浮気はホンモノだったの？ すると慰謝料は？ 4人の子供たちはどちらが養育し、養育費はどうなるの？ 週刊誌的興味は、そういうスキャンダラスな点に集中するが、本件のスクリーン上に登場するのはそんな論点ではなく、もっと本質的かつ人間的なものになるので、それに注目！その結果、ミッツィは3人の子供を連れてアリゾナ州のフ

ェニックスへ戻り、サミーだけはバートと暮らすことになったが、その是非は？

## ■■■スキップデイでの話題は？サミーの人生最大の決断は？■■■

本作はスティーヴン・スピルバーグ監督自身の少年期から青年期までの自叙伝的映画だが、それだけで151分の大作になっている。しかも、ラスト近くになって、サミーのいじめ問題と2人の同級生とのこじれ問題が描かれる。そして、「スキップデイ」と呼ばれるハイスクール最上級生が行うイベントで、サミーが撮影・編集した『ディッチデー』が上映される様子が詳しく描かれるので、ストーリーがさらに広がっていく。しかし、これはサミーが映像世界へのめり込んでいく過程を描くものとして必要だったのかもしれないが、『フェイブルマンズ』と題する本作では少しストーリーを拡散させてきたきらいがある。

しかして、本作ラストは、両親の離婚から1年後。サミーは今、ハリウッドでバートと一緒に暮らしながら大学に通っていたが、大学での目標を定められず、結局は映画の道に進みたいとバートに告白することに。そんな父子の対話の一助になったのが、その時ミッツィから送られてきた写真と手紙。その手紙を読んだバートの、サミーへのアドバイスは？さらに、その時一緒に届いていたテレビ局からの封書は？そして、TVドラマ『ホーガンズ・ヒーローズ』のアシスタントスタッフ募集の面接の結果は？そんな風に次々と訪れてくる契機の中、サミーが下す人生最大の決断はあなた自身の目でしっかりと！

2023（令和5）年3月17日記